

木村定三コレクションの中の「こけし」に関して想うこと…

カメイ美術館 青野 由美子

木村定三は、熊谷守一、浦上玉堂などの優品を数多く収集した名古屋を代表するコレクターとして広く知られている。そのコレクションは、木村氏の卓越した鑑識眼に裏付けされながら、書画のみならず、幅広い分野にまたがっている。その選りすぐりの貴重なコレクションの中に、9本のこけしが入っているのを、現在コレクションを収蔵・管理している愛知県美術館より教えていただき大変興味深く思った。どうしてこけしが、（そしてこの9本が）この稀代の「宝物庫」に紛れ込むことになったのか…いったいどういう観点で「この子達」が選ばれたのだろうか…。あくまでも想像の域を出るものではないが自分なりにこの場を借りて少々類推してみたいと思う。

木村定三コレクションのこけしについて

9本のこけしの作者のうち、佐藤丑蔵、佐藤秀一、佐藤友晴の3人は戦前からの工人で、記録によると丑蔵作は昭和18年2月21日、秀一作は昭和16年8月15日と制作年月日が判明しているようである。友晴作は不明であるが、昭和21年に没しているので確実に戦前の作品である。こけし関係者の間ではこのような戦前のこけしを、いわゆる「古作こけし」として別格扱いするのがならわしである。とはいえ、それほど入手困難な品というのではなく、これらはむしろ選りすぐりの名品を集めた木村定三コレクションの中において、やや異質感がなくも無い。そもそも「こけし」というモノ自体がレアで高価な書画骨董一般の蒐集物としては異質なものである。元来が木地師という職人の生み出した量産品であり、芸術家が生み出す作品とは違って、一点一点大きな差があるわけではなく、むしろ「こけし」という特異な木偶そのものに魅かれていた形跡がうかがわれる。

江戸後期に東北地方の木地師によって生み出されたこけしは、東北の湯治場を中心に広がった後、明治期に衰退し、その後都市部の知識人、好事家達に再発見されながら、昭和15年頃第一次こけしブームと呼ばれる一種の復興期を経験し、全国的に知られることになった。昭和40年代に第2次こけしブームをむかえ、日本中の家々の玄関先などによく見かけるようになる。現在は三たび注目され「第三次こけしブーム到来」と呼ばれている状況である。

名古屋周辺、中部、関西地方におけるこけしをとりまく様子をふりかえると、戦前からの古いこけしコレクターも数多く存在する。昭和20年代になると各地にこけし愛好会が増え始め、頒布会などを催し、当時交通の便の悪かった東北からこけしを組織的に注文し取り寄せ手に入れようとしてきた。例えば現在まで続く「伊勢こけし会」（昭和24年発足）は、その

ような活動の草分け的存在であり、また「名古屋こけし会」も、昭和41年の発足から今なお活動を続けていて、これまで多くの貴重なこけしが東北から遠く離れた中部、関西に出回る一つのきっかけとなった。東北の産地から離れたこけしは旅を続けながら、ある時はコレクターの手を転々とし、ある時は骨董屋におさまり、ある時はデパートの催事場にならべられた。木村定三コレクションのこけしが、どの時期に、どのような過程で木村氏の手に入ったのか、今でははっきりわからないが、誰か人づてか、何処かの骨董屋かで、手に入れたに違いない。たぶん産地に来て一本一本直接入手したものではないと思う。

こけし愛好家のバイブルとも言える『こけし辞典』（昭和46年、鹿間時夫監修）をあらためてひも解いてみた。佐藤友晴を引くと、友晴作こけしを数多く収集したとして特筆される故・山下光華氏の名を見つけることができた。山下氏は名古屋市中区門前町に木村氏と同年の大正2年に生まれている。昭和15年からこけし収集にうちこみ、18年にはこけし店「木形子洞」を開店している。浮世絵や陶器、李朝磁器にも精通していた文化人のようであるから、もしや木村氏はそこから入手したのではなどと、あれこれ考えをめぐらしたのだがはて真相はいかがなものであったか。山下コレクションは昭和17年には千数百本となったが、昭和20年3月3日に戦災で全焼してしまったとも記されている。

茶会にこけし

遺された茶会記によれば、木村氏は茶会にこけしを用いていたらしい。そのことから木村氏のこけしの位置づけは、あらゆる系統や工人を網羅し何千何万本と収集するいわゆるこけしコレクターのこけし観とは少し違っていただようである。茶の席で、その時々趣向に合わせ、客を出迎えたであろうこけしは、数々の茶器等の道具と同様に一期一会の茶会を形成し彩る一つの重要な要素であったろう。木村氏は、例えば点心の床に、若冲の「六歌仙」（図1）の掛軸をかけていたそうだから、和やかな童心溢れる雰囲気とこけしの存在とがよく共鳴するものだったのかもしれない。

しかし、こけしを茶会に用いるケースはそれほど一般的ではないと思われる。しかも木村氏の所有する道具は貴重な名品の数々で、それらの登場する茶会であるからなおさらであろう。もともと木村氏が茶道出身の人ではないので、かえって自由にふるまうことができたのではないだろうか。ただ『こけし 美と系譜』（昭和41年、鹿間時夫著）には茶室に飾られた高橋胞吉こけしの写真が紹介されているので、あるいは木村氏がそれを見ていたのかもしれない（図2）。例えば昭和48年3月4日の茶会の木村氏の招待状には「利休当初の茶道に還り、あくまでも厳しさに徹し乍ら皮肉とユーモア味に富んだ堅苦しさのない気楽な茶会を催したい。」とあるので、この為にこけしを準備されたのだろうか、などと空想もふくらむ。とにかくにも所有される数多くの名品からわざわざ異例のこけしが選ばれていたことを思うと、改めて木村氏の人柄を垣間見せてくれているように感じられる。

厳粛と法悦とこけしの美

こけしは、単なる愛玩物としての「かわいらしさ」の範疇に収まりきらない、多様な魅力を持っている珍しい人形であると指摘されてきている。例えば西洋人形が、美しさ、あでやかさ、かわいらしさの魅力に収斂していくのに比べ、こけしの魅力の範囲は、様々な系統やそれぞれの顔立ち、表情の差によって、極めて広いものであることがわかる。こけし研究家の鹿間時夫の言葉に従えば甘美、剛直、強烈、素朴、グロテスク…と、その魅力を分類している。特にこのうち木村定三コレクションの佐藤秀一作のこけしなどは「甘美」とたたえられるタイプのものだと言えよう。

さて木村氏は、精神に究極の感銘を与えるのは「厳粛」と「法悦」という魅力に集約されてくると語っている。この両極的な性質は神と仏に抱く感情につながり優越のないものとされる。このような視点は、「美」というものを日本人がどのように体現しうるかという点でも興味深い洞察であると言えよう。そういう観点から木村氏にとって「こけし」はどのような存在だったのだろうか。東北の山間の木地師によって生み出されてきたこけしは、信仰・宗教における祈りの場、あるいはいわゆる伝統的な特権階級や知識人による高度に洗練された芸術文化から出てきたものではない。ある意味もっとも手軽で安価な庶民（そのなかでも東北の貧しい子供たち）のために生み出されてきた木偶であった。そうしたものの中に「極限の精神的感銘」の域に近づきえるものがあったのだろうか。興味深い所である。もともと「こけし」の「けし」は芥子の実の「けし」であり、けしつぶの様に小さく愛らしいもののもの言いだ。（こけしの「こ」は木偶の「木」からきていとされている）。単純で丸みを帯びた小さな木地に、童子のような純朴な「みちのく」の「ぼっこ」（かつてこけしは木でつくられた「ぼっこ」ということでキボコとも呼ばれていた）の表情が表現され、それがそっとたたずんで在るのを目にすると、ある意味それ自体が「法悦」のもっとも素朴な形式を宿し得ているとみることも可能ではないだろうか？そもそも木村氏の蒐集は、熊谷守一の水墨淡彩画に出会ったのがきっかけと言う。世俗的な画壇から超然として、つましやかに生きた熊谷守一という特異な存在。木村氏が最初に購入したという「蒲公英に暇蟬」のカエルの表情を思いおこす時、東北の山間で育まれたこけしというものの微笑と相通ずるものを感じるのはけっして私だけではあるまい。



図1 伊藤若冲《六歌仙図》
1791（寛政3）年
木村定三コレクション

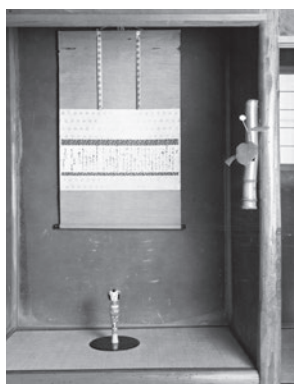


図2 京都・大徳寺高桐院松向軒
塚原涿也撮影
（出典：鹿間時夫・中屋惣舜
『こけし 美と系譜』
社会思想社、1966年、128頁）